

優秀賞

『西の魔女が死んだ』

梨木香歩著、新潮社、2001.

西川 真由（文学部 歴史学科 4年）

「シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、誰がシロクマを責めますか」

私がこの作品を初めて読んだのは、中学生時の国語の模試であったことを今でもはっきり覚えている。上記の台詞があまりにも印象的で、テスト中に作品名を鉛筆で机の上にごっそりと書き写し、図書館でこの本を探し出して借りた。実家の自室で惹きこまれるように一気に読破し、母から心配されるほどしゃくりあげ、大号泣した。私にとってとても心に残る、大切な一冊である。

本著は中学校で不登校児となってしまった「まい」が、「西の魔女」こと大好きな田舎のおばあちゃんと共に暮らし、生き方や考え方を見直していく物語だ。何が正しいか、何が喜びで悲しみか、そして自分にとっての幸せは何なのか、そういったことを西の魔女の下でまいは自分で考えるトレーニングを行っていくのだ。

まいは自然豊かなおばあちゃんの家で、確かな愛情を受け取りながら成長していく。まいがおばあちゃんに「大好きよ」と伝えると、おばあちゃんは「アイ・ノウ」と答え、おばあちゃんは時としてまいを「マイ・ディア」と呼ぶ。二人で多くのことを話し、庭からとった野菜を使って一緒に料理をし、草花の名前や特性を学んでいく。それが私には多幸感で涙が滲むほど、素晴らしく美しい生活に思えた。そんな生活の中でまいは成長していく。自分の思いを言語化し、感情を整理できるようになると、おばあちゃんはまいの成長を願って、転校し、元の生活に戻ることを推奨するのだ。

私はこの本を何度も読み返し、その度に泣いてしまう。その理由は言語化しようとしても難しい。悲しみや幸せ、嬉しさや辛さ、羨望など一緒にぐるぐる混ぜられた感情が溢れ出して、それが言葉に出来ないからもどかしくて、涙となって出てくるんだろうと思っている。

是非この作品の黄金色に輝くような伸びやかな生活を、西の魔女の哲学のような大切な考え方を、そして愛に満ち溢れた最後を読んで貰いたい。中学生で初めて読んだとき、高校生で進路に迷って読んだとき、懐かしさからふと読み返したとき、私は温かな気持ちを持ちながらも、その暖かさの温度が毎回違ったことを覚えている。きっとその時の年齢と、経験値に基づいて変化していくのだと思う。それがこの本の持つ多くの魅力のうちの一つだとも。

貴方がこの本を手にとったとき、読後どんな気持ちを持つのだろうか。
素敵な感情の揺さぶりがあることを願っています。